

8月以外は新潟周辺、刈羽、三島と局地的には、5、6月はPc型である外はいずれもOc型、即ち日照率が20%未満と言う悪天日が一番多く出現する。しかし8月は岩船、小出盆地附近はVc型、下越平場はFc型、頸城魚沼山間部、蒲原山沿山間部はOc型、他の地域はPc型が一番多く出現する。

これについて冬期は各地共Mc型、3、11月は局地を除くとMc型、4~7月、9~10月も局地を除くとPc型がこれについて出現する。即ち5月の新潟周辺、5、6月の三島刈羽沿岸部はOc型、3、4月の頸城平場、4、6月の新潟周辺はFc型、3月の東頸、古志、4~7月の岩船、6月の中下越山沿山間部、7月の西蒲、小出盆地附近、9月の十日町盆地附近、上越平場、沿岸部、10月の中越山間部はVc型、6、7月の魚沼高冷地、9、10月の岩船、9月の魚沼山沿、山間部、東頸山間部、10月の蒲原山沿山間部はMc型、3、11月は高冷地はPc型がこれについて多く出現するが、8月は両蒲を除く中下越平場、東頸山間部はPc型、三島、頸城平場はFc型、十日町盆地附近、西頸沿岸部はVc型、高冷地はMc型であるが他はOc型である。即ち8月以外は局地を除くとOc型が一番多く出現しPc型がこれについて多く出現することが知られたが、いま各月の最多出現型の出現率を調べてみると、冬期は中蒲、新潟周辺は60%内外であるが、1月は下越平場、頸城山間部、中南魚沼地方は70%以下であるが古志山沿、蒲原山沿山間部、北魚沼山間部は80%以上である。2月は西蒲、中越地方、蒲原山沿山間部、12月の南魚沼を除く中越地方、下越北部および下越山沿山間部は70%以上である。

中下越山沿山間部は3、11月は60%以上であるが、3月の下越、頸城平場、11月の頸平場および高冷地は40%以下であるが、新潟周辺20km以内、西頸、頸城山間

部、中魚沼山間平野部は50%以下である。

4、5月の新潟周辺、頸城平場、6月の新潟周辺20km以内、7、9月は新潟周辺、8月の魚沼山間平野部、古志および頸城平場は30%以下であるが、4月の中下越山沿山間部、6月の魚沼山間部、8月の三島、魚沼山間部、9月の西蒲、下越山沿山間部、中越地方、中魚沼、頸城山沿山間部はいずれも40%以上である。

また7月の下越平場、上越平場および沿岸部、10月の新潟周辺、中頸地方は40%以下であるが、5月の下越北部および中下越山沿山間部、7、10月の魚沼、蒲原山間部は50%以上であり、特に魚沼高冷地は4、6、8月は50%以上、7、9、10月は60%である。

ついで2位の出現型の出現率の地理分布は、1月の新潟周辺、2月の下越北部平場、3月の下越平場、9月の下越および西頸沿岸部、10月の頸城平場および沿岸部、三島、中越平場、11月の下越および頸城平場は20%以上、2月の頸城平場、下越地方、12月の新潟周辺、西蒲、頸城高冷地は15%以上であるが他の地域はこれ以下であり、特に1月の蒲原、古志、北魚山沿山間部、12月の中蒲、頸城山沿および西頸沿岸部は10%、3、10月の魚沼蒲原山沿山間部は15%以下である。

4月の新潟周辺、刈羽、頸城地方、5、6月の岩船、西蒲、上中越沿岸部、6月の東頸山沿、8月の中越平場、南蒲山沿は25%以上であるが、4、5、7月の蒲原山沿山間部、4、7月の魚沼山間部、7月の頸城山間部、8月の頸城高冷地は20%以下である。

いま参考のために各観測所の日照率別月別出現率のインプレットを求めてみた1例を第6図に示してあるが、前述の通り、立地条件によって非常に特徴ある分布を示していることがあわせて知ることが出来ると思う。

## 関西支部ニュース (1)

### 理事会開催状況

本年度第1回理事会は5月28日大阪共済会館に於て、新日理事のひきつぎをかねて開かれた。

第1回常任理事会は6月29日に大阪管区気象台会議室において開かれた。

また同日第1回月例会運営委員会がひきつぎについて開かれた。運営委員は常任理事全員の他に大西慶市、股野宏志、光田寧、今田克、矢吹万寿の各氏である。

これ等の理事会、委員会で決定した事項については、それぞれ別項に説明する。

### 昭和39年度月例会開催予定

6月29日の月例会運営委員会で今年度は次のような題

目で月例会を開くことを予定した。

開催月	題目	開催地	担当委員
10月	「水害」	京都	勝井
11月	「台風」	神戸	吉野
12月	「世界の気象界の現状」	大阪	山元
1月	「強風の構造」	大阪	光田
2月	「数値予報」	大阪	中島
3月	「大気汚染と公害」	大阪	中野
中国、四国地区月例会			
11月	「大雨」	松山	
未定	未定	広島	

(355頁へ続く)

おそらく風向きの真すぐ当中腹でもっとも大きく、つづいて両側面に大きくなるのではないか。

山本・私の経験によると、風が吹きつける真正面の所は、一たん止まるように圧縮され、それから両側面にわかれて強く吹きぬけるような気がする。雲の動きをみてもそう考えられる。

吉川・気圧の変化はどうか。

山本・富士山頂の気圧変化はすごく振動してしまつてよくわからない。風の息が強く出すぎるようだ。

吉川・谷川岳の例では、寒気流が上昇する所では気圧が上がるが、暖気が下るところでは下る。

**10. 登山時期の選び方の1例** 東管調査課 村越 望  
南極探険のような国家的事業ですら、その時期を選ぶ。アムンゼンとスコットの記録でも夏を境に2、3ヶ月がもっともよい時期だそう。またヒマラヤも1年に2回の適期があるということも今の定説である。私は日本の冬山でも登山の適期があるといいたい。

たとえば鹿島一赤岩尾根一鹿島槍の同じコースを、違う月に登ったパーティの所要時間をみてみよう。1つのパーティは女性1名を含む5名、積雪は20cm位、もう1つのパーティは男性のみ8名、胸までのラッセルだった。その結果、前者は4日間てさほどの労力なく登頂出来たのに、後者は6日間を要して稜線までがやっとだった。同じ行程を登るのに一方が2、3時間、他方は5時間もかかっている。これは積雪量多く、ラッセルで苦労するためである。

積雪分布図をみると、積雪量は大体地形に応じて増減しており、白馬一唐松の稜線が5mのとき、八方、遠見尾根4mと等深線は標高とともに少くなっている。また八方と遠見尾根とでは八方の2000mのところは4mなのに、赤岩では同じ高さの所でも3mとへっている。赤岩尾根の積雪状態を10月1日から1月10日にかけて推定してみよう。すると大谷原11月中旬、鹿島槍稜線10月中

(350頁より)

### 本部理事長へ要望書送付

先の総会の決議にもとずき、第1回常任理事会で文案を検討したうえ、7月1日付で本部理事長宛に次のような要望書を送付した。

#### 要 望 書

昭和39年5月28日大阪で開催された日本気象学会関西支部総会に於ける決議に基いて次のように要望します。

1. 昨年中国学術代表団の顧震潮教授を迎えて当支部としても大きな成果がありました。日中友好協会の

旬頃に根雪になるとみられる。そして次第に多くなるが急激に雪が多くなるのは12月以降である。それ故冬山というと正月休みに集中するが、それより1ヶ月ほど登山時期を早めれば雪も結構あるし、かといって、さほど多くて苦労するというほどでなく比較的楽しく行ける。各自の力に応じて冬山の登山時期は選ぶべきである。

(文責 奥山)

昭和38年度はこの他、以下の研究会例会が開催された。

#### ○第14回研究会例会

昭和38年9月27日(金) 気象庁中村記念館

1. 夏の北アルプスの気象観測  
溪峰山岳会 林 幸司
2. 航空写真による38. 1月北陸豪雪の積雪分布  
国土地理院 五百沢智也, 羽田野誠一
3. 底雪崩の発生機構  
鉄道技研塩沢実験所 荘田 幹夫

#### ○第15回研究会例会(ヒマラヤの気象)

昭和38年12月6日(金) 気象庁中村記念館

1. ムクト・ヒマールの気象  
日大山岳部OB 菅原 省司
2. パルトロ・カンリの気象  
① 東大隊副隊長 渡辺 兵力  
② トージョー・ウエザー 東条 貞義
3. ヒマラヤの気象(第1報)  
気象庁 奥山 巖

#### ○第16回研究会例会

昭和39年3月5日(木) 気象庁中村記念館

1. 北海道学芸大の大雪山遭難について  
研究会々長 広瀬 潔
2. ヨーロッパにける山岳気象研究の現状、およびスイスロース谷における谷風の範囲について  
東京教育大 吉野 正敏

議定書により、今年10月訪中学術代表団の派遣が決定していますが、この派遣団に気象界の代表も加わるよう積極的に努力して頂きたい。

2. 気象庁が現在とりあげている業務再編成・機構改革のうち観測網の再編成や調査研究体制等の問題は気象学会としても関心が深いので立案に際しては、気象学の研究者者の意見も充分とり入れられるよう理事長名で、気象庁長官に申し入れて頂きたい。

(363頁へ続く)

の厚さを考えると二つ以上の層にあらわれるという難点があり、特に高層雲、乱層雲などは頂の高さの範囲がわからなかったが、航空機による観測資料が多くなってくると、これらの雲は三層のいずれにも所属できないことが確かめられてきた。そこでこの改正では雲のできる対流圏を階層 (stage) でわけ巻雲、巻積雲、巻層雲は上層に、高積雲は中層に、層雲、層積雲は下層によくあらわれるとし、a) 高層雲は通常中層にあらわれるが上層にもおよぶ、b) 乱層雲は通常中層とあらわれるが上層、下層におよぶ、c) 積雲 積乱雲は底は通常下層にあらわれるが、中層、上層までのびるという remarks がつけ加えられている。以上の理由により1962年1月1日から気象庁の地上気象観測法には上層雲 (High Clouds)、中層雲 (Middle Clouds)、下層雲 (Low Clouds) の名称を廃止し次の表が採用された。

雲のよくあらわれる高さ

巻雲 (Cirrus)	上層 High étage	極地方 3~8km
巻積雲 (Cirrocumulus)		温帯地方 5~13km
巻層雲 (Cirrostratus)		熱帯地方 6~18km
高積雲 (Alto cumulus)	中層 Middle étage	極地方 2~4km 温帯地方 2~7km 熱帯地方 2~8km

(2) 巻雲、巻層雲、巻積雲の書き方の変更

高層雲 (Altostratus)	普通中層に見られるが、上層までひろがっていることが多い。
乱層雲 (Nimbostratus)	普通中層に見られるが、上層および下層にひろがっていることが多い。
層積雲 (Stratocumulus) 層雲 (Stratus)	下層 Low étage { 極地方地面付近~2km 温帯地方地面付近~2km 熱帯地方地面付近~2km
積雲 (Cumulus) 積乱雲 (Cumulonimbus)	雲底は普通下層にあるが、雲頂は中、上層まで達していることがある。

巻雲の読みを「かんうん」とすることに気象学会で一応決定したことについては天気 Vol. 9, No. 1, p. 26 に掲載された。

その後いくつかの提案があった (たとえば、天気 Vol. 10, No. 11. p. 29 および Vol. 11. No. 3. p. 80) その後、「かんうん」と読むことについて多数の人の反対があり、気象庁測候課では、なじみ深い発音を残すこととして、けん雲とするなどの意見を加味し、巻雲が絹のような光沢をもつ特徴をとり入れ、また「けん雲」では他の雲形名称とのバランスがとれないので絹雲を採用することとした。

1965年1月から、巻雲、巻積雲、巻層雲は絹雲、絹層雲、絹積雲と云うことに気象庁は統一する予定である。

(気象庁測候課)

(355頁より続く)

幹事交代について

永年幹事として事務局をあげて頂いた一色光雄前幹事は都合により5月末日をもって幹事を辞任することになり、6月1日より浜本丈夫幹事が就任した。浜本幹事は主として法務関係の仕事を担当することにし、主として会計関係の仕事を補佐するために同日付けで中村順子氏が幹事補佐に就任した。

尚これにともなって気象学会の関西支部事務局は大阪管区気象台調査課から予報課に移った。

×	×	×	
×	×	×	×
×	×	×	

関西気象協会研究助成運営委員

関西気象協会からの要請により当学会支部から次の4名を代表として委員に推せんした。

- 橋本清美、中島暢太郎
- 山元竜三郎、中野道雄

なお、大阪管区気象台から推せんされた野口篤美、萩谷長男、山本主夫、三沢基一の各委員および協会代表の内田泰、平林道夫、牧守真の各委員とあわせて合計11名の委員が任期4年で委員会を構成することになった。なおこの委員会は個人申請者からの申請題目を審査するだけでなく、積極的に助成すべき研究題目の開発にもとりくむことになっている。